

橋口創吾さん

山口大学医学部医学科2年生(学士編入)

東京大学でキューバの歴史・文学を専攻。卒業後はマッキンゼー・アンド・カンパニー日本支社にて企業の経営戦略立案・実行に携わり、エムスリー株式会社にて病院向け事業の企画・営業として医療の実情に触れる。大学在学中にGRANMAのインターンシップで人生を方向づける経験をたくさん積む。

「健やかにそだち、幸せに死ねる社会」の実現という志を抱くに至り、2025年、27歳で医学部に編入。吉田松陰ゆかりの地、山口県で、医道の探求をがんばっています。

取材日時 2025年2月23日

現在は鹿児島に住んでおり、フルリモートで東京の医療系IT企業に勤めています。4月からは山口大学の医学部に編入して、医師になる予定です。関心があるのはプライマリーケアの分野で、診療科で言うと総合診療科か小児科ですね。

資本主義修行として2年間勤めたマッキンゼー、そして1年間の現職を経て、いよいよ目指すべきキャリアをスタートさせるところです。地域社会で活動していく上で、スモールビジネスをするのか、農業をするのかなど、様々なことを考えてきました。その中で、自分というフィルターを通して貢献するには医療が良いと考えました。

路線を変えるというよりは、向かうべきところに向かうための道を歩んできた感覚です。これまでの経緯を親に話しても納得感があり、自分にとってナチュラルな方向に進めていると感じています。

医療に関わることについては、原体験が二つあります。

一つは、祖母が保育士をしており、その保育園で自分も育ったことです。日本のローカルで働いていきたいと思ったのも、保育園から見ていた目の前に広がる田畑の光景が原風景になっています。振り返った時には、いつもそこに立ち返ることが多いですね。学生時代に保育士の資格も取りました。子どもに関わる人生を歩みたいなとずっと思ってきましたので、もともと修行を終えたら、子どもと接する仕事にシフトチェンジするつもりでした。小児科医としてやっていきたい気持ちも、その時の思いに通じています。

もう一つは、祖母が亡くなる間際の医療を見て、死にたい状況で死ねないことが、なんと不幸せなことだろうかと思ったことです。在宅医療も増えてきていますが、死にたい場所で死ねるためのシステムや医療サービスがあると良いと考えています。クリニックの経営者という関わり方も考えましたが、自分の特性としては専門家であり、プレイヤーであることにあります。誰かのために自分の価値を発揮できていることを直接感じられるのが良いのです。経営が第一の役割になるのは苦しいだろうと、修行の3年間で感じました。

＊

拓人さんとの最初の出会いは、秋田でやっていた「ドチャベン」でした。秋田でシェアビレッジをされていた丑田俊輔さんが、古民家をみんなで共有して使いながら、土着のベンチャーを秋田で作るイベントをされていました。拓人さんが湯沢で作ろうとしていたプロジェクトに、コラボできそうな人を発掘しつつ、エンパワーメントしつつ、最終的に一緒にプロジェクトをやっていくことを想定して、モデレーターをされていました。たまたま自分もそれに参加していて、「何を言っているか分からないけど、面白いことを言っている人だ」と思いました。

興味のある人が秋田のフィールドを回るイベントも企画されていて、そこにも参加しました。そこで拓人さんに、「やれることがあればやりたい」と声をかけました。その時は特に何も発展しなかったのですが、1年くらい後にイベントに声をかけていただき、それから一緒に動くようになりました。拓人さんはこの言い方は好きではないのですが、いわゆる「韃持ち」的な感じでした。拓人さんと一緒にいた頃には、まさしく「やりあてる」という感覚がありました。「耕してもらった」という感覚もまた、非常によく感じました。直観的にそういうことが起きていたのだと感じています。

一緒に働いていた時期は、2019年10月から2020年3月までの半年間くらいです。当時大学4年生で、休学中でした。大学を休学して鹿児島にいて、何もできずにくすぶっていた時に声をかけてもらったのです。当時の自分を振り返ると、カスミみたいな人間だったと思います。パッションはあるけれど、何ができるわけでもない。お金持ちの家庭ではありませんでしたが、東大生というブランドでハイソな社会に属しつつ、ローカルに生きたいと思っていました。拓人さんが発しているビジョンは他で見たことがありませんでしたし、ローカルで感じていた違和感にも通じるところがありました。漠然と自分の中で考えていたものを、拓人さんは一つの形にしようとしていました。その流れに乗りたかったのです。だから鹿児島から関東に帰って、一緒に働き始めました。やっていたことは秋田湯沢のエリアがメインで、「ファーマンテーターズウィーク」を企画していた頃です。遊休資産を使ってクリエイティブブロックを作り、それを価値に転換していくことを、ルーラル（地方）で一番難しい湯沢の地域からやろう、と話していました。虎ノ門ヒルズのふもとで、どこかのデベロッパーが次のビルを建てるまでの期間に、キャンピングカーを持ち込んでイベントをする、といったこともしていました。

ローカルで感じた違和感というのはどういうことかと言いますと、大学に入った2016年は「地方消滅」という本や「里山資本主義」が出た頃で、地域創生がブームだった時代です。西栗倉村とか海士町とかをモデルにして、「自分たちもああなる」と言って、国の色々な予算を地域が取り始めていました。大学もローカルのプログラムを作っていて、そのおかげで自分も様々な地域に足を運んでいました。1年生の頃は南伊豆、2年生は福井と高知、3年生では鹿児島に出入りしていました。しかし総じて、行政からの予算が終わるとそれで終わり、ということになっていて、そこへの違和感を感しました。

本来、健全な民主主義が働く町政や市政であれば、本当にそのプロジェクトが地域に求められていたら続いていくはずですが。なのに、続いていかないということはシステムがいけない、つまりはビジネスではないとやっていけない、ということです。実際に入った地域でも、プロジェクトが全くうまくいっていないのをたくさん見てきました。行政が連れてきた人が地域の人への反発を招いたり、地域に根を張っていないものはうまくいかないのです。

うまくいっていた例としては、福井の米農家がやっているカフェがすごく良かったです。ちゃんとビジネスになっていて、地元にも求められているから、コロナも乗り越えて続いている。自律的に良いものが続くためには、ビジネスが必要なんだなと感じました。

拓人さんといった頃には、ツーリズムの話をよくしていました。キューバの独立の時代や、植民地主義のことも研究していました。観光やツーリズムは、植民地主義の中でできてきたものです。地域の資源をいかに外貨に変えるか、という視点で、観光が完成されたアプローチになったのです。街の見方の話もしてくれました。いまだに僕の中で思い出すことの一つです。渋谷のカフェに呼ばれてA4の紙を何枚か出されて、「このように考えているんだ」と、地域の中のアクターを5パターンくらいで見ている話。経済、文化、政治、技術、社会。これをそれぞれ押さえると、街を現実的に動かすことができるようになっていく、という世界の解釈の仕方です。

当時は、拓人さんは一番難しいルーラルな田舎で始めることに意味を見出しているようでしたが、アーバンな意味での都市にも今は取り組んでいることが面白いです。

Q. 拓人さんのことは、当時どのように見えていましたか？

野生動物のように感じていました。自分では全く分からない嗅覚の鋭さで、すさまじいスピードで動く。精神的な躁状態がずっと続いているような中でも、しっかりと信念を貫かれていて、その場で起きたものを自分の信念に基づいて動かしている。頭で考えてやっているのではなく、野生の感覚でやっている。この生き物にはなれないなと思いました。

野生動物っぽい嗅覚の鋭さは、出会った人に対して「この人はこうしたらこうなりそう」という判断に基づいているのかもしれませんが。拓人さんは360度的に人を「耕そうとしている」ことが根幹にあると感じました。ただ横にいるだけでは分からない、他者の内面の察知が早い。そこまで考えて動いているのかは分かりませんが、「誰と誰をやり当てたらこうなりそう」ということを、頭で考えているというよりは、感じたままに動いているように見えました。

世田谷のご実家に一度お邪魔したことがあります。その時に近くの公園を散歩しながら聞かせてくれた話で、中学1年生の時に中学3年生の彼女ができて、その彼女の元彼に恨まれて、近所の公園でボコボコにされたというエピソードがありました。激しい10代を過ごして、野生の感覚を培われたのかなど。人間味を感じるエピソードというか、同じ教育システムの中でこんな人が育つんだ、という驚きがありました。

車での移動が多くて、運転席と助手席で話をするシーンがよくありました。そこで出てくる拓人さんからの生の言葉には、なまめかしいし、暖かさもあるものを感じていました。野生であるゆえの、厳しさの奥にある優しさのようなものですね。当時、何もできない、人間存在として仕上がっていない自分に、「やりあてる」ように色々な人に出会わせてくれて、対等に机を並べて巻き込んでもらえて。

仕事の中で「これをやり遂げた」という感覚は自分の中に全くないのですが、毎日飲み会の場で話を振ってもらって、ろくに話せないという、「やりあてられて失敗する」ということを無限に重ねさせてもらえました。そういう場を与え続けてくれる優しさがありました。常に混沌とさせたまま、ずっと進んでいっているので、プロジェクトのチーム自体がゆるっとしていて、外から人が入りやすいとか出やすいとかがある。その進め方だからこそできることがあったのです。

僕の理想的な「文明人」としての核は、拓人さんによるところが本当に大きいです。自分がどこで生まれて、どういう学びをして、という自分自身のコンテキストはありますが、拓人さんに「やりあてて」もらった半年間が、それ以降の思考やものの見方の核になっています。拓人さんのロジックはすごいですね。一秒前の話とどう結びついているのか、読み返してみるとよく分かりません。飛躍しているのです。大学でキューバの詩を批評しているフランス人の論文をスペイン語で読んでいた時に、論理の飛躍加減に拓人さんを思い出しました。難解な古典を解説しているような気持ちになることがあります。

たまたま拓人さんとの共通していたのが、自分の学生時代の研究テーマがキューバ革命だったことです。詩人と社会思想をテーマに卒業論文を書きました。「グランマ」という会社名もキューバ革命のカストロが乗った船です。ゲリラ戦的な、ゆるやかな革命を起こそうとしている革命運動家みたいだな、と感じます。激しいものではないですが、思想レベルでは革命を起こそうとしています。太平洋を挟んだ島国でゲリラ戦をやっている、自分もそこに参加している感覚になりました。明治の文明開化の時代に生きたような人だと感じます。渋沢栄一ってこんな人だったんじゃないか、と思ったりもします。

自分にとっての革命運動はこれ、というのは、まだ作り途中です。フィールドを定める意味でもそうですし、テーマとしてもようやく医療に定まったというフェーズにしていると感じています。

普段、拓人さんから僕自身へのフィードバックというのは全くなく、覚えている限りでは2回だけです。かなり厳しいフィードバックでした。秋田湯沢でのプロジェクトで、東京中心のクリエイターを連れて行ってツアーをやったことがあったのですが、2泊3日で40人集めた帰りのバスで、「ツアー全体のディスカッションをこの後やるから」と言われて、ファシリテーターを橋口くんやってくれ、と言われました。それが、あまりにもうまくできなくて、次の日カフェに呼ばれて、「ファシリテートしているのを見ながら、こういうことを考えていたんだ」と、かなり激しめにフィードバックしてもらいました。その後、ものすごく美味しいジンギスカン屋に連れて行ってもらって、「頑張れよ」と言ってもらいました。

そうして半年くらい拓人さんと一緒にいて「やりあてて」もらって、一旦ここを離れた方が良いなと思いました。離れないと、いつまでもフォロワーでいてしまうと感じたからです。拓人さんの強烈なインシアチブに、僕は残念ながらまだ一緒に走っていける胆力がないな、と思いました。スキルセットやマインドもそうですし、自分自身の存在のあり方として、そこまで磨き込めていないと感じました。もともと半年くらい一緒にやるという話で、半年経った頃にコロナで制限もあったため、「別々で動くことにしましょう」ということになりました。

その後、マッキンゼーに入ったのも、拓人さんに言われた一言が大きいです。スマイルズの遠山さんと、副社長の参謀的な幹部の方と会った時に、拓人さんから「橋口くんは参謀的な立ち位置になると良い」と言われました。「そのためにマッキンゼーに入ると良いよ」と言われて、そこからマッキンゼーを目指すことになり、マッキンゼーに入ろうと思いました。資本主義修行の場としてそこを選んだのは、拓人さんが見せてくれた世界に自分も近づいていくためです。

後日談があります。その後も数回、飲みに行ったり、ご飯に連れて行ってもらったりしました。会社員になってから2年目に京都でご飯に行った時に、「僕としても資本主義修行を2年弱して、振り返ってみて拓人さんのためにできることを何かしたいと思っているんですけど、それが何か分からないんです」という話をしてしまったのです。そういう話をしないようにしたいと思って、勝手にブレーキを踏んでいたのですが、その時はしてしまいました。そうしたら拓人さんが言ったのが、「俺に貢献するとかはしなくて良いから、10年後ミロくんが学べるフィールドを作っていてほしい」と。なんてすごいことを言うんだ、この人は、って思いました。ここからまた10年、僕はそこにいかなくや、と奮い立たされました。「乗っかる言霊」を置きに来てくれるのです。こんな人は本当に他にいません。自分としてもまだまだだからこそ、勉強しなければいけないし、努力しなければいけないと思っています。

＊

Q. 拓人さんと他の人との関係は、どのように見えましたか？

合う合わないが激しいんだな、ということですね。当時僕が見ていた大人たちの反応として、拓人さんがいた場所や働いた場所でも評判が分かれていました。ポジティブなことを言う人と、「大変だったんだよ」という人と。ポジティブなことを言う人はフォロワーではなく、ちゃんと自分で信念を持って手を動かしている人たちでした。拓人さんが信念を持って語る世界に、直感的に一緒に進んでいる感じの人ですね。機会を見せてくれるとか、面白い人を繋げてくれる、という印象を持っている人が多かったです。

誰かと誰かをつなげるとき、拓人さん自身は身を引いています。「やりあてたら」、あとは出会った二人に任せて、自分は引いている。そしてたまにポイントポイントで一石を投じる、急に違う角度からの問いを立てることがあります。そうすると、場のカオスさがかなり増して、思わない方向に転換したりします。会話が華やかになるというか、発酵していく光景をよく見ていました。

拓人さんと一緒に仕事をしてきた人たちの話を思い起こすと、「これから始まっていこうとしている人たちを始めさせていっている」という感覚があります。地域では愛されていても、全国的には知られていなかったり、趣味でやっているけど仕事にはしていない、といった人たちにもう一段踏み込んでいく機会を渡している。拓人さんは承認欲求の話をよくしていました。承認欲求がない人間が最強で、それはオタクなんだ、つまりはオタクが最強だ、という話です。僕に対しても、ただの大学生だったのに、とりあえず連れ回してくれました。秋田のツアーでもそういう人が多くて、クリエイターとして自立している人は少なく、自分の「サード」をこれから始めようとしている人が多かったですね。

コロナになり始めたくらいの頃、「マスタークラス」というオンラインの学ぶ場が一瞬流行して、これを日本のローカルでやれたらいいね、と話していたのを思い出しました。拓人さんは日本中を駆け回って第二の湯沢を探そうとしていた時期で、本州をほとんど駆け巡っていました。そうした繋がりから、マスタークラスができるくらい色々なスキルを持った人が、拓人さんの周りにはいるのだろうなあ、と思います。

＊

tactという言葉から覚えている話では、私がいた時期も、「tactful」という言葉をよく使っていました。指揮者が使う指揮棒のことです。指揮をしている状態が空間に充満している、という意味ですね。関連するワードとして、1回だけ出てきたのは「オーケストレーション」でした。拓人さんは根底にキューバ革命のカルチャーがあるから、よくスペイン語を使っていました。キャンピングカーのプロジェクトも、いくつかの英単語の頭文字を取って「エルフォコ(elfoco)」としていました。その「o」の一つがオーケストレーションです。「オーケストレーション」よろしく、プレイヤーたちが混じり合いながら、みんなで一つのものを作っていく。そこに指揮棒を振っている拓人さんがいるイメージです。グランマの社名が変わるのは寂しい一方で、よりtactfulな世界に向かっていくためのステージ転換なのかな、と思いました。ファーマンテーターズウィークで、「ポエトリーライティングがほしいんだ」という話をされていました。そういうところに、一途さんがはまっているんだろうな、と話を聞きながら思いました。

＊

Q. 細部をよく覚えているとのことですが、元々物覚えが良いのですか？

物覚えが良いという感覚はありません。拓人さんと話したことはインパクトが強かったから、よく覚えているのだと思います。拓人さんといった時期のことは、毎日何らかのシーンで思い出します。自分のバイブルと呼べる本が一冊だけあって、何かある時にはその本を読み返すのですが、感覚としてはそれに近いですね。拓人さんと聞いたこと、話したこと、一緒に見たものを思い起こす。頻繁に思い起こすから、記憶に定着しているのだと思います。脚色しているのかもしれませんが、それも含めて僕の中ではそういう体験になっています。

バイブルは、真木悠介(見田宗介)さんの「気流の鳴る音」です。ラテンアメリカ研究コースにいて、隣の研究科で見田さんが教えていらっしゃいました。「気流の鳴る音」は、共同体のあり方の話から始まります。社会福祉の障害者施設や孤児院のエッセイ的な文章です。街の住民の共同体をビジョンに近づける、モチベートしていくところに通じるところがある気がしています。メディアサーフも最初のマスターピース的なところは、青山のコミュニンでした。これからの時代の社会変革、次のフェーズに移っていく時に、コミュニンの思想が大事になってくるのだと感じています。

拓人さんからはあまりにも自分の人生の大きなところをもらいすぎていて、気軽に連絡が取れなくなっているところでもありました。今回メッセージをいただいて、お役に立てるのなら嬉しいです。

(聴き手:酒井一途)